

青少年のための情報リテラシについて

ーネット・ケータイ利用と負の指標ー

初田 真知子¹⁾

Information Literacy for Young People

- Internet/ Mobile Phone Utilization and Negative Index -

Machiko Hatsuda¹⁾

要約：

本論文は、青少年の情報メディアをめぐる問題において、負の要因がどこにあり、どのような指標が問題解析に適しているかを検討したものである。今回、インターネットの通信（ブログ、チャット、掲示板等）や携帯電話メールの利用状況と、それに伴って生じた「いやな思いをした経験」について、大学生114名に対してアンケート調査を行った。その結果、79%の学生が何らかの「いやな思いを経験」しており、91%の学生が「子供のネット教育が必要」と考えていることがわかった。負の指標としての「いやな思いをした経験」には、「仲間はずれ」という指標が、「ひどい言葉」や「利用料」等他の指標よりも深く関係していることが示された。また、「ひどい言葉を書かれた経験」という負の指標には、「ひどい言葉を書いた経験」が、「利用度」や「返信タイミング」等他の指標よりも深く関係しており、ひどい言葉は何度か通信をやり取りする間に生じることを示唆しているようだ。本論文では、以上を含むアンケート調査結果を列挙し、青少年の情報メディア利用の傾向と、負の要因を探る指標について考察した。

キーワード：ネット、ケータイ、情報リテラシ、いじめ

1. はじめに

ネットの書き込みがきっかけであった小学生による同級生殺害事件（佐世保事件、2003年）が社会に衝撃を与え、青少年の情報メディアをめぐる問題が深刻化している。子供の情報リテラシ教育の必要性を誰もが繰り返すが、情報リテラシで教育すべき内容が何であるのかは明らかでない。インターネット通信（ここではインターネットの検索機能ではなく、ブログ、チャット、掲示板等の機能に注目し、ネットと呼ぶことにする）や携帯電話（ここでは携帯電話のメール機能に注目し、ケータイと呼ぶことにする）利用の特徴は、その

情報メディア利用の低年齢化、及び年齢・性別・地域性を無視した関係の構築であり、2000年以降急激に拡大している事件や負の社会現象（いじめ、誹謗中傷、集団自殺、援助交際、恐喝、暴行、薬物売買等）で不可欠な役割を担っている点にある^{[1][2]}。情報リテラシは、これらの事件や負の社会現象を解決してしまうような特効薬ではあり得ない。かといって情報リテラシは単に、フィルタリングソフトによってインターネットで閲覧できるサイトを管理すればよい、というものでもない。情報リテラシ教育の目標は、ネット・ケータイ利用の特徴が引き起こす負の現象をきちんと理解させることであろう。

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

そこで本研究では、ネット・ケータイ利用の特徴とそれが引き起こす負の現象に関してアンケート調査を行い、その傾向と重要な負の指標をした。今回は大学生をアンケート調査の対象としたが、本研究に基づき青少年から小・中学生の低年齢まで各世代で解析する必要があると考えている。

2. 「インターネットや携帯電話によるコミュニケーションについて」のアンケート調査

2.1 目的

情報メディアの利用状況と負の現象について、その傾向を見出し、どのような要因が重要であるのかを検討する。

2.2 方法

2006年12月、浦和大学1年生及び浦和大学短期大学部有志、男女学生114名に対して調査を行った。

調査項目は次の10項目である。アンケート用紙詳細は付録1を参照されたい：

- ①性別
- ②インターネット通信（ブログ、チャット、掲示板等）利用度
- ③携帯電話メール利用度
- ④いやな思いをした経験
- ⑤ひどい言葉を書かれた経験
- ⑥ひどい言葉を書いた経験
- ⑦返信タイミング
- ⑧仲間はずれと感じた経験
- ⑨利用料
- ⑩子供のネット教育の必要性

3. 結果

3.1 集計結果

上述の10項目に関する回答を集計した結果が図1から図10である。

回答者114名中、男性が77名（67%）、女性が37名（33%）であった（項目①、図1）。

情報メディアの利用状況は、②インターネットに関しては図2に、③携帯電話に関しては図3に示した通りとなった。インターネットのブログ、チャット、掲示板等（インターネット通信）は全く利用したことがない者が19%に上るのに対して、携帯電話メールを全く利用したことがない者は

1%以下で（携帯電話の所持率99%以上）時々やり取りする程度の者が10%でしかない。一方、インターネット通信を毎日利用している者は27%で、携帯電話メールを毎日利用している者は90%に上る。携帯依存症というような、1日に100通も200通もメールをしないと不安になるような者^[3]は、今回の調査対象の中では8%よりは少ないようである。インターネット通信はパソコンを主に利用するものだとすれば、情報メディアの主流は携帯電話であり、コミュニケーションの主流は携帯メールであることが確認された。

今回の調査で負の指標として焦点をあてたのは、④いやな思いをした経験に関してで、集計結果を図4に示した。いやな思いをしたことがない者が21%で、それ以外の79%はいやな思いをした経験があることを意味している。いやな思いをした経験でも程度に差があり、その内訳は次の通り；ひどくショックな出来事があった者が5%、時々いやな思いをする者は28%、あまり気にならない程度は46%である。このいやな思いをした経験の具体例を同定する項目として、⑤ひどい言葉を書かれたのか、⑧仲間はずれと感じたのか、⑨利用料に起因することなのかを取り上げた。⑤ひどい言葉を書かれた経験が全くない者は56%で、それ以外は44%（図5）。⑧仲間はずれと感じた経験が全くない者は47%で、それ以外は53%（図8）。⑨利用料で苦労している者は3%で、それ以外は97%（図9）。これらのことから、いやな思いをした経験として、ひどい言葉を直接書かれたという経験よりも、仲間はずれにされたと感じた経験の方が重要な要因であるようだ。今回の調査対象に関しては、利用料に関する問題はあまり重要ではなかったようだ。

次に焦点をあてた負の指標は、ひどい言葉（誹謗、中傷、罵倒など）を⑤書かれた経験があるか、⑥書いた経験があるかで、集計結果を図5、図6に示した。ひどい言葉を書かれた経験が全くない者は56%と過半数を占め、書かれた経験のある者は44%である。ひどい言葉をとてもよく書かれるという回答は2%であった。一方、ひどい言葉を書いたことが全くない者は39%で、書いた経験のある者は61%である。ついついひどい言葉を使ってしまうという回答は8%であった。ひどい言葉を

図1 ①性別

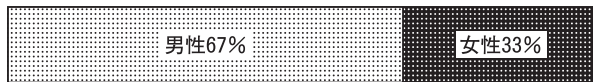


図6 ⑥ひどい言葉を書いた経験

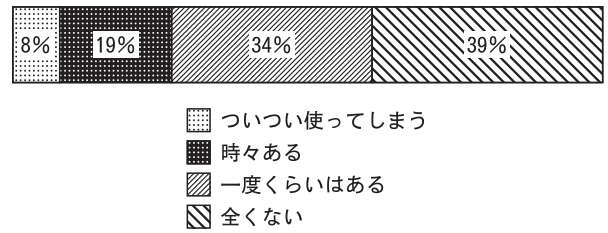


図2 ②インターネット通信利用度

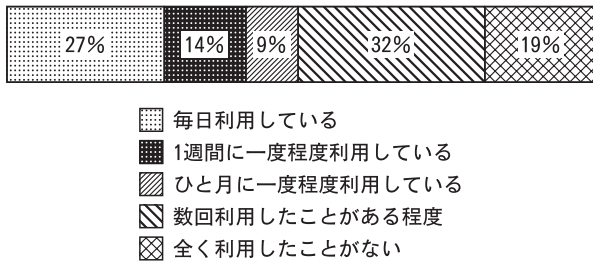


図7 ⑦返信タイミング

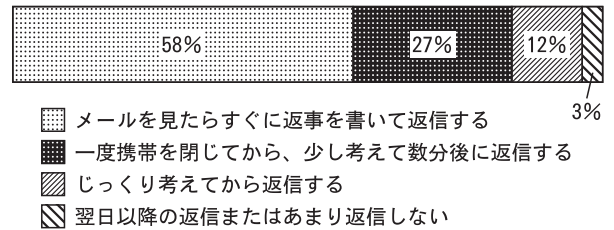


図3 ③携帯電話メール利用度

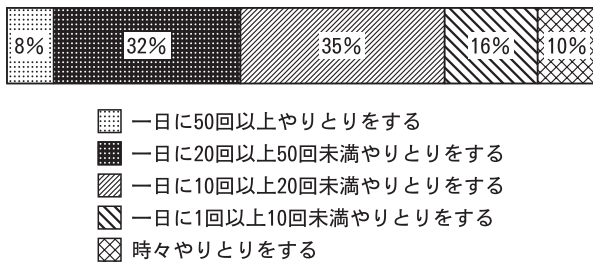


図8 ⑧仲間はずれと感じた経験

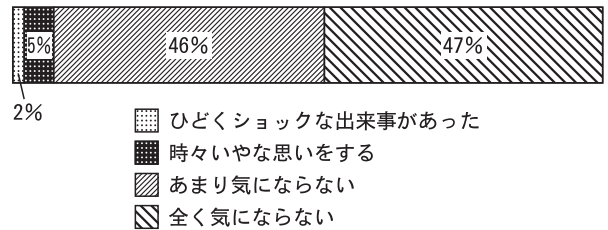


図4 ④いやな思いをした経験

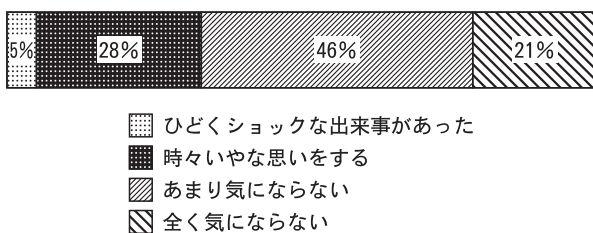


図9 ⑨利用料

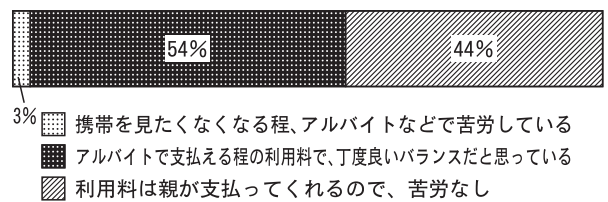


図5 ⑤ひどい言葉を書かれた経験

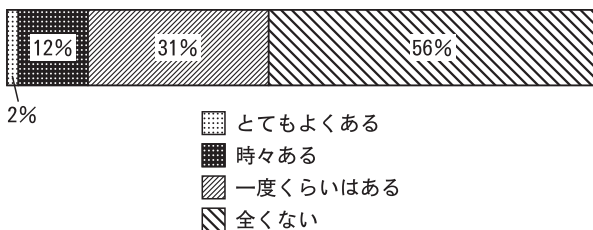
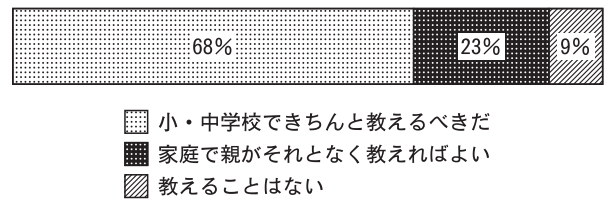


図10 ⑩子供のネット教育の必要性



書かれた経験と書いてしまった経験とは、興味深い対応関係があるようだ。それぞれの選択肢の回答数の多い順番は同じであるが、ひどい言葉を書かれた経験よりも書いてしまった経験の方が少しずつ多いという結果が出ている。もしもこの結果が実際の状況であるならば、8%のひどい言葉をついつい使ってしまう者達が、ひどい言葉をよく書かれている特定の2%の者とばかりコミュニケーションをとっていることになる。そして、半数弱の39%の者はひどい言葉を全く書き送ったことはなく、ひどい言葉を書かれた経験のない半数以上の56%の者がコミュニケーションをしているのはつまりその39%の者達だけということではなければならない。しかしながら、このような状況は想定しにくい。なぜならば、普通ならひどい言葉ばかり送りつける相手とは、コミュニケーションを続けようとは思わないからである。やはり普通の状況を想定すると、ひどい言葉を使ってしまう者の数と、ひどい言葉を受け取った者の数は等しいはずである。それが調査結果では同数ではないので、その状況の認識の仕方にフィルターがかかっていることが考えられる。たとえひどい言葉が書き送られてきても、それを「ひどい言葉なのではない」とか「気にしない」というようにして、ひどい言葉が書き送られたと認識しないようにしているのではないだろうか。この点に関して、次章で考察を付け加えることにする。

ひどい言葉を書き送ってしまうということは、考える“間”もなく返信できてしまう携帯電話の特性で説明されることがよくある。手紙であれば、ひどい言葉を書いた後でも一晩置いてみてひどい言葉を書き直すことができたのだが、携帯電話の利便性がその余裕をなくしてしまったのだ、というように。そこで、⑦返信タイミングという指標を入れた。結果は図7に示した。手紙のように一晩置くという者はわずか3%にも満たない。メールを見たらすぐに返信するという者が58%の過半数を占め、少し間をおくという者が39%となっている。メールが会話のテンポで行われている部分が6割で、4割はひと呼吸おいてから返信しているようだ。このひと呼吸がどのような意味をもつのか、返信内容を検討したり、言葉を

選んだり、少し返信を遅らせることである種の感情を伝えようとするのかは明らかではない。

ケータイによるコミュニケーションでいじめの問題となるのは、直接本人にひどい言葉を書き送ることだけではなく、仲間の間のケータイで悪口を書かれていたとか、ケータイ・コミュニケーションの仲間からはずされたというような類の仲間はずれの問題がある。このような⑧仲間はずれと感じた経験の調査結果を、図8に示した。全く気にならないのは半数弱の47%で、それ以外が53%である。「あまり気にならない」のは46%である。この選択肢は「ケータイによる仲間はずれの経験」はあったがあまり気にならないという状況、つまり、軽い程度の仲間はずれにされた経験である。あまり気にならないという心理的フィルターの存在は、前述のひどい言葉を書かれた経験（⑤）と書いた経験（⑥）のデータからも推測できる。つまり、仲間はずれにされた経験がある者は、過半数を占めていることになる。

一般に携帯電話の利用料金は、当面の大きな問題であるはずであるが、そのことによって苦労していたり、いやな思いをしたというような負の現象につながることはあまりないようである（図9）。今回の調査対象で、苦労しているのは3%で、44%は親負担、54%はアルバイトでまかなえる程度の丁度よいバランスのようである。当然ながら、母集団のとり方で大きく異なるはずである。

最後に、子供のネット教育の必要性を尋ねたところ、図10で示したように、68%の者は小・中学校できちんと教えるべきだと回答し、23%は家庭でそれとなく教えればよいと回答している。教えることはないと回答した者は、9%にすぎない。91%の者は子供のネット教育を必要であると考えている。

3.2 指標の相関

上述の10項目の間でカテゴリー分析としての相関係数の一覧を表1に示した。これら45通りの相関の中で比較的相関係数の大きかった主なものは以下の組み合わせであった。それぞれに関してのクロス集計表と相関のグラフを参照していただきたい。

(1) ⑤ひどい言葉を書かれた経験と⑥ひどい言

表1 アンケート項目間の相関

順番	項目番号	相関係数	順番	項目番号	相関係数	順番	項目番号	相関係数
1	⑤ と ⑥	0.434	16	⑦ と ⑧	0.156	31	③ と ⑤	0.072
2	④ と ⑧	0.399	17	⑤ と ⑩	-0.151	32	② と ④	0.065
3	⑤ と ⑧	0.339	18	① と ③	-0.147	33	③ と ⑩	0.060
4	③ と ④	0.338	19	① と ⑩	-0.138	34	② と ⑤	0.048
5	④ と ⑦	0.262	20	⑦ と ⑨	0.128	35	⑧ と ⑩	0.045
6	⑥ と ⑧	0.257	21	③ と ⑥	0.116	36	③ と ⑨	0.043
7	② と ⑧	0.248	22	④ と ⑨	0.116	37	② と ⑥	0.043
8	③ と ⑦	0.227	23	⑧ と ⑨	0.111	38	② と ③	0.039
9	③ と ⑧	0.224	24	⑦ と ⑩	0.111	39	⑥ と ⑨	0.038
10	① と ⑤	0.222	25	① と ⑦	-0.092	40	⑥ と ⑩	-0.037
11	④ と ⑥	0.206	26	① と ⑧	-0.087	41	⑤ と ⑨	0.030
12	① と ④	-0.188	27	④ と ⑩	0.082	42	① と ⑥	-0.026
13	④ と ⑤	0.178	28	① と ⑨	0.077	43	② と ⑩	-0.016
14	⑨ と ⑩	0.164	29	⑤ と ⑦	-0.076	44	⑥ と ⑦	0.007
15	① と ②	-0.159	30	② と ⑨	0.075	45	② と ⑦	0.006

図11 相関(1) ひどい言葉を書かれた経験(⑤)と書いた経験(⑥)

	⑧1	⑧2	⑧3	⑧4	⑧計
④1	1	1	2	2	6
④2	1	3	19	8	31
④3	0	2	26	23	51
④4	0	0	5	20	25
④計	2	6	52	53	113

単位(人)、n=114, $\chi^2=72.2$, $r_c=0.46$

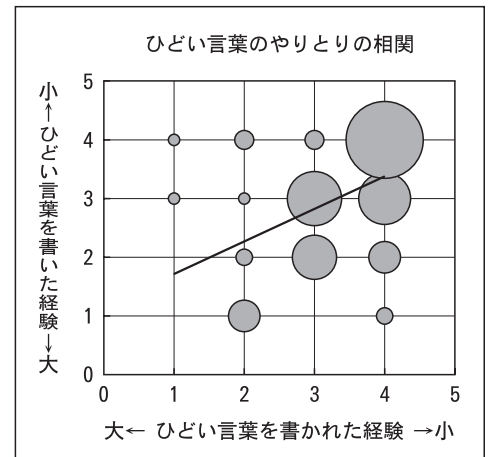


図12 相関(2) いやな思いをした経験(④)と仲間はずれと感じた経験(⑧)

	⑧1	⑧2	⑧3	⑧4	⑧計
⑤1	0	0	1	1	2
⑤2	7	2	1	3	13
⑤3	0	13	19	3	35
⑤4	2	7	17	38	64
⑤計	9	22	38	45	114

単位(人)、n=113, $\chi^2=28.1$, $r_c=0.29$

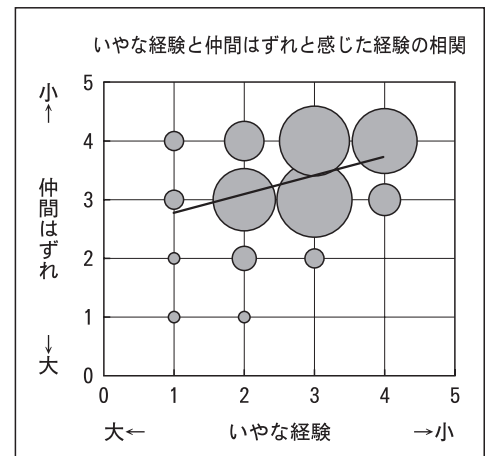


図13 相関(3) ひどい言葉を書かれた経験(⑤)と仲間はずれと感じた経験(⑧)

	⑧1	⑧2	⑧3	⑧4	⑧計
⑤1	1	0	0	1	2
⑤2	0	1	7	5	13
⑤3	1	4	23	7	35
⑤4	0	1	23	40	64
⑤計	2	6	53	53	114

単位(人)、n=114、 $\chi^2=47.0$ 、 $r_c=0.37$

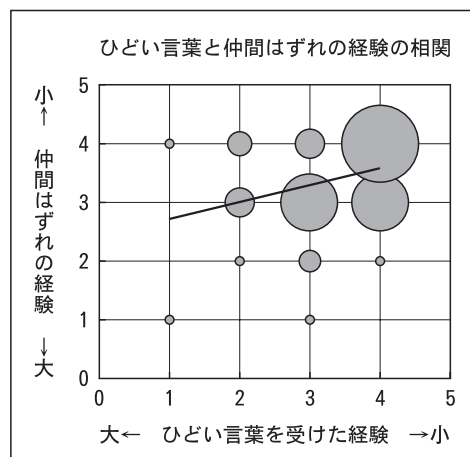
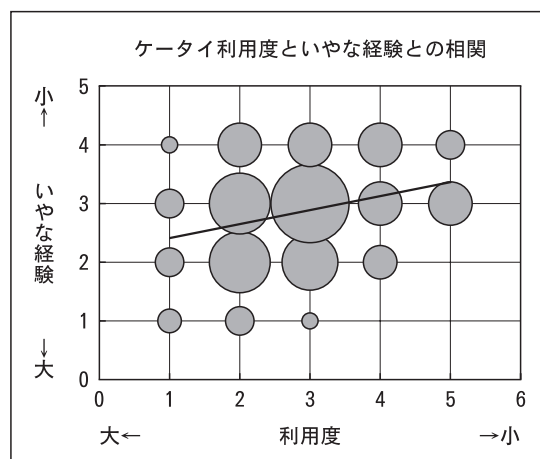


図14 相関(4) 携帯電話メール利用度(③)といやな思いをした経験(④)

	④1	④2	④3	④4	④計
③1	2	3	3	1	9
③2	3	13	13	7	36
③3	1	11	21	7	40
③4	0	4	7	7	18
③5	0	0	7	3	10
③計	6	31	51	25	113

単位(人)、n=113、 $\chi^2=18.1$ 、 $r_c=0.23$



葉を書いた経験(図11)

- (2) ④いやな思いをした経験と⑧仲間はずれと感じた経験(図12)
- (3) ⑤ひどい言葉を書かれた経験と⑧仲間はずれと感じた経験(図13)
- (4) ③携帯電話メール利用度と④いやな思いをした経験(図14)

調査当初は、ひどい言葉を書いてしまうのはじっくり考えずにすぐに送信してしまうから、または1日に大量のメールに明け暮れて言葉もぞんざいになってしまうのではと考え、ひどい言葉(⑤、⑥)と返信タイミング(⑦)や情報メディア利用度(②、③)との間の相関を期待した。ところが、今回の調査では、これらの間の相関係数は小さく相関があるとは言えないようだ。相関が比較的大きかったのは、(1) ひどい言葉を書かれ

た経験(⑤)と書いた経験(⑥)であった(図11)。ひどい言葉を書きもせず書かれもしない者が最も多い状況ではあるが、この状況の対応点、(図11の右上の大きな丸のプロット)を除いて少しでもひどい言葉と係わった部分に注目すると、図11の右下三角の斜辺の部分に中くらいの大きさの丸のプロットが比例する関係に並んでいる。この相関の状況というのは、ひどい言葉を書かれた者はひどい言葉を書く、または、ひどい言葉を書く者はそれを書かれる、という状況である。つまり、ひどい言葉は、すぐに返信してしまうからとか、メール件数が多すぎるからというような原因で生じるというよりも、言葉のやり取りの中で生じていく事が示唆された。さらに、ひどい言葉を書かれた軸に関してその経験は少ない方向にずれていることが、前述の「ひどい言葉が書き送られてもあえて気にしないようにするフィルター」が

かかっていることを示しているのではないだろうか。

負の指標としての④いやな思いをした経験と非常に弱い相関があると解釈できるのが、⑧仲間はずれと感じた経験であった（相関(2)、図12）。これは、いやな思いの要因が、直接のひどい言葉というよりも、仲間同士のコミュニケーションにおける疎外感である方が重要であるということである。さらに興味深いことに、相関(3)の⑤ひどい言葉を書かれた経験と⑧仲間はずれと感じた経験にも、非常に弱い相関があり（図13）、⑤ひどい言葉と④いやな思いには相関が見られなかったということだ。これは、直接ひどい言葉を書かれてもあまりいやな思いはしない、又は気にしないが、仲間はずれにされたようなひどい言葉を書かれると、いやな思いがするということである。佐世保事件に見られるような小・中学生のひどい言葉による負の現象では、加害者と被害者の間でひどい言葉が使われ、事件が起こった。しかし、大学生が調査対象である今回の調査では、加害者と被害者というような2者間の直接のひどい言葉よりも、仲間の中での疎外感を引き起こすようなひどい言葉、又は仲間はずれと感じるふるまいの方が重要な要因であることが示唆された。

携帯メールの利用度(③)といやな思いをした経験(④)の相関(4)は、相関係数としては大きな値ではないが、相関図(図14)を見ると、非常に弱い正の相関が見て取れる。ある程度携帯

メールを利用している者はある程度いやな思いもしているという結果である。携帯メールをほとんど利用していない者は、とてもいやな思いをしたという経験がないという、もっともらしい結果も再現している。

4. 考察

以下に、相関係数で現れなかったいくつかの指標の間の関係を考察してみよう。

インターネット通信（アンケート項目②、ネット）と携帯電話メール（アンケート項目③、ケータイ）利用の度合いを比べてみると（図15）、両者には顕著な違いが見られる。ケータイは1日に10回から50回の利用者が半数以上を占めている山型分布となっており、9割の者はよく利用しているのに対し、ネットは毎日利用する者とほとんど利用しない者とのふた山の分布になっている。このケータイの高い利用の理由として、調査対象の学生達のライフスタイルに適しているどこでもいつでも利用できるという利便性、及びパソコンよりは安価であることなどの情報機器の特性が挙げられよう。しかし、最も重要な理由は仲間同士のコミュニケーションに不可欠なことだ。上述の情報機器の特性によって普及した携帯電話が、青少年のコミュニケーションのあり方を変え、『ケータイ』というコミュニケーションの一部分と変化しているのだ。『コミュニケーションのニホンザル化』や『人の昆虫化』というようなこと

図15 インターネット通信(②)と携帯メール(③)の利用度

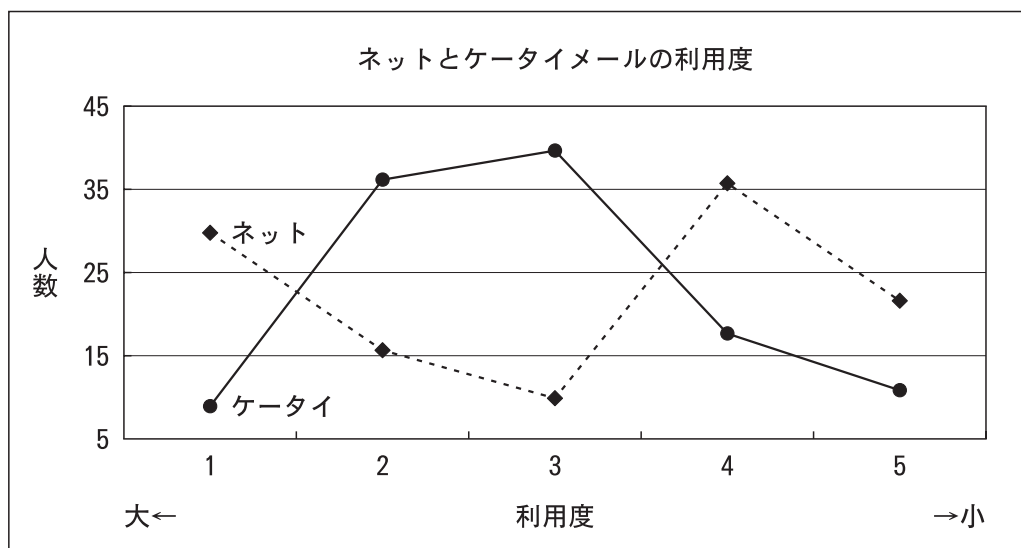


図 16 携帯メール (③) の男女依存性 (①)

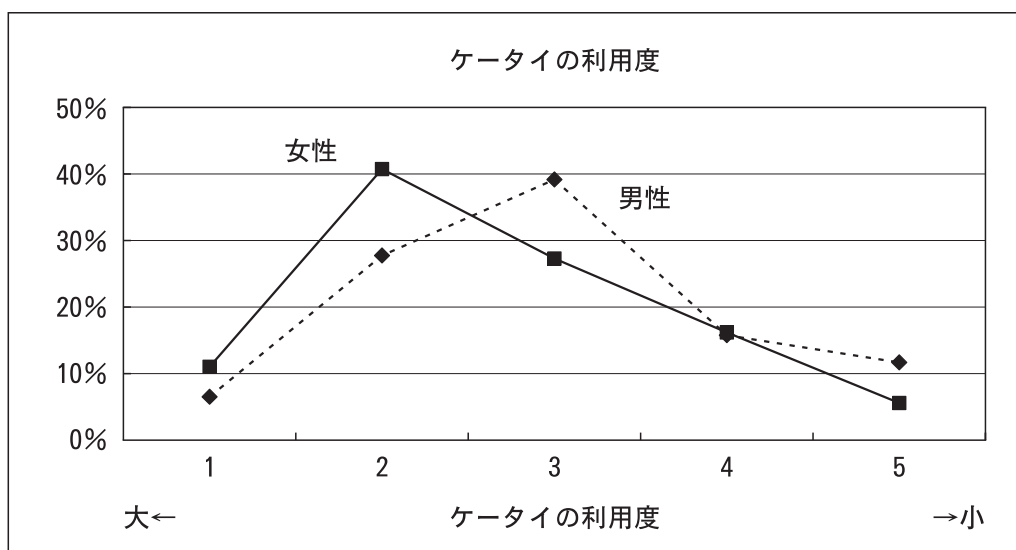
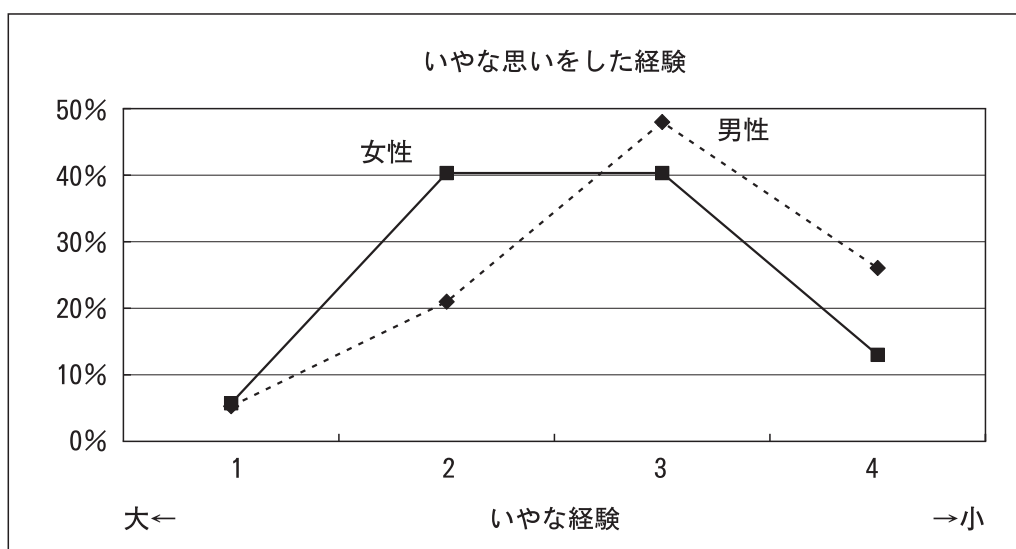


図 17 いやな思いをした経験 (④) の男女依存性 (①)



があるのかもしれない。前者は、ケータイによるコミュニケーションは、ニホンザルのコミュニケーション（仲間の所在を確認するためのものでメッセージを含まない）と変わらないというものだ^[4]。後者は、ケータイを手にしてメールの送受信をしていると、ケータイが昆虫の触覚みたいに思えてくる、というものだ^[5]。ニホンザル（リスザルでも）にはコミュニケーションの規則性が存在することが報告されている：あるサルが声を出した後、ある短い間隔で他のサルが声を出した場合は前の声への応答とみなされるのだ^[4]。これはまさに、返信タイミングに関するアンケート結果⑦（図7）で、「メールを見たらすぐに返信する」

者が約6割に上る現状に対応しているのではないだろうか。さらに、ひと呼吸の“間”にも、何らかの対応があるのか興味深い課題である。

男女差についても、定性的な違いが見られた。図16、17では③ケータイの利用度と④いやな思いをした経験を①男女別にグラフに表示した。女性の方が分布の山の位置がケータイの利用度及びいやな思いをした経験の大きい位置にあることがわかる。カテゴリー値の平均値は、ケータイの利用度では男性3.0、女性2.6、いやな思いをした経験でも男性3.0、女性2.6となっており、やはり女性の方がケータイの利用度が大きく、それに伴い、

いやな思いをした経験も大きいことがわかる。

この結果は、10代の女性の妙な言葉遣いが目に付く^[4]という一般的印象と一致していると思われる。言葉の主な二つの役割は、メッセージの伝達と、相手と所在を確認し合い情緒的に結びつくための確認である。ケータイによる近年のコミュニケーションは、メッセージ伝達よりも情緒的な結びつきに重きをおくコミュニケーションなのではないだろうか。このことは、相関(2)と相関(3)の関係からも裏付けられるであろう。ケータイで用いられる言葉は客観的な言葉や文章よりは仲間うちだけに通じるような言葉や言い回しであったり、絵文字や記号であったりする方をより用いるのは、その表れなのである。そのため、妙な言葉遣いとして目に付くことになる。さらに、そのような情緒的結びつきのための言葉でいやな思いをする経験も多くなるのではないだろうか。もしもメッセージ伝達のための客観的文章ならば、いやな思いをすることはそう多くはないであろう。

5. おわりに

今回の大学生を対象としたアンケート調査の結果の主なものを以下にまとめる。

- 情報メディアの主流は、携帯電話のメールである。
- 8割の者は何らかのいやな思いを経験しており、0.5割がひどくショックな出来事の経験がある。
- 約4割の者はひどい言葉を書かれた経験があり、0.2割は頻繁にひどい言葉を書かれている。
- 6割の者はひどい言葉を書いてしまった経験があり、0.8割はひどい言葉をついつい使ってしまう。
- 6割の者はメールを見たら直ちに返信しており、約4割はひと呼吸置いてから返信している。
- 約6割の者は仲間はずれと感じた経験がある。

- いやな思いは、直接のひどい言葉や利用料によるものというよりは、仲間はずれと感じることによるものだと示唆された。
- ひどい言葉は、やり取りの中で生じることが示唆された。
- ひどい言葉を書かれても気にしないような感受性のフィルターがあることが示唆された。

今回のアンケート調査は大学生を対象に行ったが、小学生の場合とは傾向が異なることが予想できる。「自分も小学校の時にいじめをうけたことがある。あの時、今みたいなハートだったら、どんなに楽だったか。」という学生のコメントが、問題の本質を突いているのかもしれない。小学生の頃の無防備な傷つきやすい心理状況は、青少年の成長に伴い無意識に傷つかないように防備することができるようになるのであろう。それは、今回のアンケート調査の⑤ひどい言葉を書かれた経験と⑥ひどい言葉を書いた経験の度数の考察からも、又は相関(1)からも示唆されたように、「ひどい言葉が書き送られてもあえて気にしないようにするフィルター」が作られ、自分は傷つかないように防備することができるようになるのではないだろうか。それでも、8割の学生がいやな思いを経験している(図4)のが今回の調査による現状である。情報メディアの利用は加速的に低年齢化しているが、小・中学生の子供達は傷つかないように自らを防備する能力は未発達のままである。だから、無防備でコントロールもできないゆえに、感情のまま自己中心的な行動を起こしてしまうのである。そして恐ろしいことにネット・ケータイという情報メディアが、自己中心的な行動を起こす傾向を助長してしまっているらしい^{[6][7][8]}。無防備な子供達を様々な負の現象から守るために、情報リテラシ教育で教えるべき内容を多面的に検討することが急務なのである。

付録1 アンケート用紙

「情報リテラシのあり方に関するアンケート」
インターネットや携帯電話によるコミュニケーションについて

- ①あなたの性別
- 1 男性
 - 2 女性
- ②あなたはインターネットでチャットや掲示板、ブログなどの書き込みを書いたり読んだりしていますか？
- 1 毎日利用している
 - 2 1週間に一度程度利用している
 - 3 ひと月に一度程度利用している
 - 4 数回利用したことがある程度
 - 5 全く利用したことがない
- ③あなたは携帯電話でメールを利用していますか
- 1 一日に50回以上やりとりをする
 - 2 一日に20回以上50回未満やりとりをする
 - 3 一日に10回以上20回未満やりとりをする
 - 4 一日に1回以上10回未満やりとりをする
 - 5 時々やりとりをする
- ④インターネットや携帯電話の文章や言葉で、いやな思いをしたことがありますか？
- 1 ひどくショックな出来事があった
 - 2 時々いやな思いをする
 - 3 あまり気にならない
 - 4 全く気にならない
- ⑤インターネットや携帯電話で、ひどい言葉（うざい、きもい・・・等）を書かれたことがありますか？
- 1 とてもよくある
 - 2 時々ある
 - 3 一度くらいはある
 - 4 全くない
- ⑥インターネットや携帯電話で、ひどい言葉（うざい、きもい・・・等）を使ってしまうことはありますか？
- 1 ついつい使ってしまう
 - 2 時々ある
 - 3 一度くらいはある
 - 4 全くない
- ⑦インターネットや携帯電話のメールなどに対して、どのようなタイミングで返信しますか？
- 1 メールを見たらすぐに返事を書いて返信する
 - 2 一度携帯を閉じてから、少し考えて数分後に返信する
 - 3 じっくり考えてから返信する
 - 4 翌日以降の返信またはあまり返信しない
- ⑧インターネットや携帯電話による友人達とのコミュニケーションで、仲間はずれにされたような疎外感を感じたことがありますか？
- 1 ひどくショックな出来事があった
 - 2 時々いやな思いをする
 - 3 あまり気にならない
 - 4 全く気にならない
- ⑨インターネットや携帯電話の利用料金のために、アルバイトなどをして苦労していますか？
- 1 携帯を見たくなくなる程、アルバイトなどで苦労している
 - 2 アルバイトで支払える程の利用料で、丁度良いバランスだと思っている
 - 3 利用料は親が支払ってくれるので、苦労なし
- ⑩いやな思いをさせられたり、時には事件のきっかけとなったりすることもあるインターネットや携帯電話は、その利用上のマナーを子供の頃にきちんと教えるべきだと思いますか？
- 1 小・中学校できちんと教えるべきだ
 - 2 家庭で親がそれとなく教えればよい
 - 3 教えることはない

参考文献

- [1] 下田博次、『ケータイ・リテラシー 子どもたちの携帯電話・インターネットが危ない!』、NTT出版、2004年
- [2] 今一生、『大人の知らない子どもたち ネット・ケータイ文化が子どもを変えた』、学事出版、2004年
- [3] 日本記号学会編、『新記号論叢書「セミオトポス②」ケータイ研究の最前線』、p.170-208、慶応義塾大学出版会、2005年
- [4] 正高信男、『ケータイを持ったサル 「人間らしさ」の崩壊』、p.60-93、中公新書、2003年
- [5] 立花義遼、日本記号学会編、「マクルーハンとケータイ」、『新記号論叢書「セミオトポス②」ケータイ研究の最前線』、p.170-208、慶応義塾大学出版会、2005年
- [6] 小此木啓吾、『ケータイ・ネット人間の精神分析』、朝日新聞社、2005年
- [7] クリフォード・ストール（倉骨彰訳）『コンピュータが子供たちをダメにする』、草思社、2001年
- [8] 柳田邦男、『壊れる日本人 ケータイ・ネット依存症への告別』、新潮社、2005年

Abstract

The purpose of this paper is to figure out negative indices which are suitable for analysis of problems related to information media for young people. A questionnaire survey on utilization of the internet communication or the mobile-phone mail focusing on "unpleasant feeling" caused by them was performed for 114 university students. It was shown that 79% students experienced "unpleasant feeling" and 91% students consider that "net education for children is necessary". Results suggest that "unpleasant feeling" as a negative index is deeply related with "alienation" as a negative index rather than other indices such as "terrible words" or "use charge". Results also show that "receiving terrible words" is deeply related with "sending terrible words" rather than other indices such as "number of mails per day" or "reply timing". This may suggest that "terrible words" are induced by exchanging some mails. This paper includes results of the questionnaire survey and considerations on them.

Key Words: internet, mobile-phone, information literacy, bullying